

# 平成30年度 全国学力・学習状況調査における

## 北九州市立 東谷 中学校の結果分析と今後の取組について

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、平成30年4月17日(火)に、3年生を対象として、「教科(国語, 数学, 理科)に関する調査」と「生徒質問紙調査」を実施いたしました。

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にさせていただきたいと思っております。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。本校では、他の教科等も含め、総合的に学力向上を目指しています。

### 1. 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- (3) そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

### 2. 調査内容

- (1) 教科に関する調査(国語, 数学, 理科)

主として「知識」に関する問題(A)	主として「活用」に関する問題(B)
・身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容 ・実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能	・知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力 ・様々な課題解決のための構想を立て実践し、評価・改善する力

※理科については、主として「知識」に関する問題と主として「活用」に関する問題を一体的に問う。

- (2) 生徒質問紙調査

生徒質問紙調査
○学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する調査

※本校の3年生については、単学級ですので、個人が特定されないように公表の方法については、配慮しています。

### 3. 教科に関する調査結果の概要

- (1) 全国・本市の学力調査(国語A・B, 数学A・B, 理科)の結果

本年度の結果	国語A		国語B		数学A		数学B		理科	
	平均正答数	平均正答率								
本市	24.0	75	5.4	60	22.6	63	6.1	44	17.3	64
全国	24.3	76	5.5	61	23.8	66	6.6	47	17.9	66

## (2) 本校の学力調査結果の分析

国語A	全体的な傾向や特徴など	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項と言語についての知識・理解・技能は県や全校平均よりも上回っていたが、全体としては平均に達していない。
	よくできた問題	語句の意味や漢字の書き取りに関しては、全国平均を上回り、選択式問題の解答率は高い。
	努力が必要な問題	読むことや読む能力を問う問題に関しては、県や全国平均をかなり下回っており、文脈や描写を正確に捉える力をつける必要がある。
国語B	全体的な傾向や特徴など	どの分野においても県や全国平均を下回っている。国語Aと同様に、読むことに関しての苦手意識を持つ高い生徒の割合が高いと思われる。
	よくできた問題	選択式の問題に関しては無解答率もほぼ0%であり、問題に関する取り組みは認められる。
	努力が必要な問題	グラフや資料と文章の関係を考えながら読むことの正答率が極めて低い。語彙力を高め、記述に慣れるような指導が必要である。
数学A	全体的な傾向や特徴など	どの分野においても県や全国平均よりも下回っていた。分野によっては全国平均よりかなりの差があるものがあった。数学の基本的な部分が不足している生徒の割合が高い。
	よくできた問題	正の数・負の数の計算問題は全国平均を上回っていた。
	努力が必要な問題	基本的な問題でも少し思考力が必要な問題に苦手意識があり、努力が必要である。一次関数のxの増加量に対してのyの増加量を求める問題の無回答率が高かった。
数学B	全体的な傾向や特徴など	数学Aと同様にどの分野においても県や全国平均よりも下回っていた。分野によっては全国平均よりかなりの差があるものがあった。ただ「数と式」においては若干下回る程度だった。
	よくできた問題	数と式においては全国平均より若干下回る程度であった。
	努力が必要な問題	思考力、判断力、表現力を要する問題に関して苦手意識を持っている生徒の割合が多い。一次関数の応用でグラフから時間を求める問題や倍数の説明の問題、図形の前提条件を変えると結果がどう変わるか等の問題の無回答率が高かった。
理科	全体的な傾向や特徴など	どの分野も全国平均より下回っていた。主として「知識」に関する問題の正答率の方が低く、基本的な知識の定着ができていない生徒が多いと考えられる。
	よくできた問題	地学的領域の正答率は全国平均とほぼ同じであった。
	努力が必要な問題	グラフや表を使った問題や化学的な探究を求める問題の正答率が低い。知識を定着させたくて、それを活用する力をつけていく必要がある。

## 4. 学校での学習活動、家庭での生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要

質問紙調査の結果分析	
<p>○「自分には良いところがあると思いますか」という質問に対して肯定的な回答をした生徒が県や全国の平均よりもかなり少ない。自分の良いところを意識できていない傾向にある。反面「将来の夢や目標を持っていますか」という質問に対しては、県や全国の平均よりも高いので自分の将来に関しては意識は高いようである。</p> <p>○「毎日同じくらいの時刻に寝ていますか」「同じくらいの時刻に起きていますか」という質問に対して、肯定的な回答が県や全国の平均よりも低いので生活のリズムが確立できていない生徒の割合が多ようである。</p> <p>○学習面については、宿題・学習計画、予習・復習、家庭学習の時間などで県や全国の平均よりも低いので家庭学習が不足気味の生徒の割合が高いようである。</p> <p>○数学、理科に共通して苦手意識を持っている生徒は多いが、勉強することが大切だと思っている割合は高く、数学、理科が分かるようになりたいと思っている生徒も多い。</p> <p>○全体的にしなければならないことはやろうという意識はあるが、意欲的に主体的にするという部分ができていないことが課題ではないかと考える。</p>	

## 5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

### ① 教科に関する取組(全校で・学年で・学級で)

<p>◎学方向上のための特設時間の実施(東谷タイム、全職員)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・毎朝、8:30からの10分間</li> <li>・小中連携教員は、活動の補助を行う。</li> <li>・アシストシートなどの活用</li> <li>・希望者を対象とした放課後の勉強会を月・水の17:00まで実施する(5教科 当番制全職員)。</li> </ul> <p>◎アシストシート、活用力を高めるワークの活用(5教科の職員、担任)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・単元末に活用ワーク等を位置付け、活用する。</li> <li>・長期休業日などに冊子にして活用する。</li> </ul> <p>◎学方向上のための「毎日の課題」(家庭学習向け)の実施(5教科の職員、担任)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・5教科の基礎・基本の定着を図る問題を配布し、東谷ノートにはって提出させる。</li> </ul> <p>◎学方向上に関する授業改善研修の実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・モデル授業を実施し、取り組み内容の確認を行い、課題を話し合い、分かる授業を目指していく。(全職員)</li> <li>・数・英・体の授業にはT2の教員(空き時間の職員)を入れて、個人指導や補助をする。</li> </ul>
---

### ② 家庭生活習慣等に関する取組

<p>○学校通信、保健だよりを通して「早寝早起き」「テレビの視聴時間・ゲームの時間の見直し(特に審査前)」について家庭へ啓発する。【ノーテレビ・ノーゲーム・ノー携帯22時電源OFFの取組】</p> <p>○学校行事の際の校長あいさつの中に、本校の実態や課題をいれ、家庭へ啓発する。</p> <p>○学活の時間を使って、自分たちの課題を確認させ、よりよい生活習慣について考えさせるようにする。また、生徒会の取組に組み入れて自覚を促す。</p> <p>○東谷ノートの活用により、家庭と学校をつなぎ、保護者に家庭学習の重要性について理解を求める。</p> <p>○小学校と連携し、家庭学習の時間を小学校1年生から段階的に増やしていく。</p> <p>また、春休みの課題を作成し、実施することで、学習の遅れなどを個別に把握し、きめ細かな指導体制の確立と中1ギャップへの対応を行う。</p>
--